

特31

359

小學
校用
土佐史要

特31
359

青木義正著述

小學
校用
大生史要

版權所有

教育書房合梓

小學校用土佐史要卷之下

青木義正 編纂

第四章 一豊公ヨリ豊資公ノ時マデ

山内氏
先祖

山内氏ノ先祖ハ藤原鎌足公ヨリ出テ初メ相摸

ノ山内ニ居リシヲ以テ山内氏ト稱スト云フ。夫

レヨリ數十世ニシテ盛豊ニ至リ尾張ニ移ル。一

豊公ハ其三男ナリ、幼ヨリ美濃尾張ノ間ニ流寓

シテ、遂ニ羽柴秀吉ノ旗下ニ屬セリ。元龜元年紀元

二千二百三十年 織田信長朝倉義景ヲ越前ニ討チシ時、敵

ノ勇將三段崎勘右衛門ヲ撃テ武名ヲ顯ハシ、後

小學土佐史要 卷下

數度ノ戰功ニ因テ、遠州掛川カクガハニ封セラレ、六萬石ノ領主トナル。

一豐公嘗テ一駿馬ヲ得テ武功ヲ立テント欲ス、適マ東國ヨリ良馬ヲ牽テ來ル者アリ、公之ヲ得ント欲スルノ情尤モ切ナリシト雖、年來貧困ニシテ其志ヲ果タス能ハス、家ニ歸リ嘆息シテ情ヲ其室ニ語ル、室若宮氏賢德アリ、即チ貯フル所ノ私金ヲ筐底ヨリ出タシ、公ヲシテ其希望ヲ達セシム、後人傳ヘテ美談トス、

慶長五年紀元二千二百六十年 德川家康諸侯ヲ率ヰテ上杉

景勝ヲ討チシ時、一豐公モ亦軍ニ從ヒ、下野ノ諸川カハニ陣ス。時ニ石田三成等家康ノ在ラサルニ乘シテ、兵ヲ大坂ニ舉ゲシカバ、室若宮氏ワカミヤ急使ヲ發シテ變事ヲ報ス。一豐公此報ヲ得テ封ノマ、家

一豐公
土佐ニ
封セラ
ル

康ニ獻シ、且ツ諸侯ニ先ンジテ自ラ質ヲ納レ、掛川ノ居城ヲ獻セント請フ。次テ關ヶ原ノ役、亦軍功アリシカバ、亂平グニ及テ、家康殊ニ其武功ヲ賞シテ、土佐二十四萬石ノ國守トナセリ。

下野ニ使セシ脚夫ヲ孫作ト云ヘリ、時ニ既ニ途塞リテ通セザリシヲ以テ美濃路ヲ取リシガ、途中盜賊ニ遇テ衣服刀劍悉ク掠奪セラレ、然レトモ大切ノ書狀ハ豫テ若宮氏ノ注意ニ因リ、笠ノ紐ニ編ミ込ミアリタルヲ以テ、幸ニ無事ナルコトヲ得タリ、夫レヨリ孫作鮭屋ノ床下ニ潜伏スルコトニ晝夜鮭ヲ盜テ飢ヲ醫シ、一士人ヲ殺シテ其衣服刀劍ヲ奪ヒ、辛ウシテ下野ニ到着スルコトヲ得タリト云フ、

一豐公
入國

慶長六年正月、一豐公始メテ土佐ニ入國ス。此時浦戸一揆ノ殘黨、尚ホ所々ニ潜伏セルノミナラ

五家老
 ズ、長宗我部氏恩顧ノ士民モ自ラ安ンゼズシ
 テ、深ク山中ニ逃レ、或ハ國外ニ脱走スル者アリテ、國內未ダ平穩ナラズ。是ニ於テ此年二月、角
 觥ノ戲ヲ浦戸城下ニ催シ、一揆ノ殘黨七十餘人
 ヲ誘殺ス。次テ使ヲ東西諸郡ニ遣ハシ、又親ラ國
 中ヲ巡リテ士民ヲ安堵セシメ、舍弟修理亮ヲ中
 村ニ封シテ支藩トシ、家老深尾和泉ヲ佐川ニ、林
 伊賀ヲ窪川ニ、安東半左衛門ヲ宿毛ニ、山内刑部
 ヲ本山ニ、五藤内藏之助ヲ安藝ニ封シテ五家老
 ト稱ス。是ヨリ國內大ニ治マリ、士民安堵ノ思ヲ

ナセリ。

後ニ至テ中村支藩ヲ本宗ニ合シ、窪川土居ヲ廢シ本山土居
 ヲハ存シテ旅館ニ充ツ、

高知城

慶長八年八月、一豊公嘗テ浦戸城ノ狹キヲ憂ヒ、
 大高坂ノ古城ヲ修理シテ之ニ移リ、改メテ河
 山ト稱ス。然ルニ其後屢ハ洪水ノ害アリシヲ以
 テ、竹林寺ノ僧空鏡ノ説ニ因リ、又高知城ト改ム、
 今ノ高知公園是ナリ。

此時國澤ニ要法寺ヲ立ツ、是レ要法寺町ノ起原ナリ、

本山一揆

此年十一月、長宗我部氏ノ遺臣高石左馬之助父
 子、租稅催促ノ事ヨリ、一揆ヲ本山ニ起シ、近村ヲ

掠メテ瀧山ノ要害ニ據ル。大川内汗見川等近傍
ノ村民之ニ應シ、其兵凡百餘人ニ及ヘリ。本山ノ
領主山内刑部等、擊テ之ヲ破リシカバ、左馬之助
等瓜生野ニ退キ、尋テ讚岐ニ逃ル。

藤並大
明神

慶長十年九月、一豐公卒ス。年六十一。潮江村日輪
山ニ葬ル。後文政二年紀元二千四百七十九年、豐資公代十二ノ時
ニ及ヒ、公若宮氏及ビ忠義公ノ三靈ヲ合祭シテ、

藤並大明神ト稱ス。

野中良
繼

寛永十三年紀元二千二百九十六年、忠義公代ニノ時ヨリ、野中良
繼ツク奉行トナリ、藩ノ政事ヲ掌ルコト二十餘年、其

野中氏
ノ先祖

間大ニ公益ヲ謀リ、風俗ヲ改メ、今ニ至ルマテ國
人其恩澤ヲ受クルコト頗ブル深キヲ以テ、茲ニ
其功業履歷ノ大畧ヲ舉ク。

野中良繼通稱ハ傳右衛門兼山ト號ス。其先祖ハ
美濃ノ人ニシテ、後山内氏ノ親戚トナル。寛永十
三年、良繼年二十二ニシテ、養父玄蕃ノ後ヲ襲テ
奉行トナリ、長岡郡本山ヲ領ス。

良繼學問ヲ好ミ、谷時中ジチウヲ師トス。又屢ハ山崎闇
齋サイ、ラグラサン、セイ、小倉三省等ノ學者ヲ本山ニ會シテ、經書ヲ講
セリ。然ルニ此時大學ノ外、經書類ノ我國ニ來レ

朱子學
起ル

ル者甚ダ稀レナリシカバ、良繼、官吏商人ノ江戸
長崎ニ往ク者ニ託シテ之ヲ索メシメ、或ハ支那
ニ注問シテ、辛ウシテ小學、十三經等ノ書ヲ得タ
リ。又小學句讀等ヲ出版シテ國中ニ廣メシカバ、
是ヨリ朱子ノ學大ニ土佐ニ起ルニ至レリ。

郷士

此時長宗我部氏ノ舊臣等、其主人ヲ失ヒテ方向
ニ迷フ者多カリケレバ、忠義公良繼ニ命シ、是等
ノ輩ヲシテ國中ノ荒野ヲ開墾セシメ、舉ケテ士
格ニ准シ郷士ト謂フ。又屢ハ大工事ヲ起シ、有名
ナル山田堰、八田堰、鎌田堰ヲ設ケ、山田野市、八田、

大工事

野中氏工事ノ一長切抜ノ圖



鎌田ノ井筋ヲ通シ、津
呂室津、手結ノ三港ヲ
鑿テ、舟入川ヲ開通シ。
數千町ノ荒野ヲ變シ
テ熟田トナシ、舟運ノ
便ヲ與ヘシコト實ニ
多ク。其他國中ニ命ジ
テ、漆、桑、楮、茶ナド有益
ノ諸木ヲ植ヘシメ、農
民ノ士女ニ定業ヲ課

スル等世ノ公益ヲ謀リシコト、擧ケテ算フベカラズ。

吾川郡八田堰行當切抜ハ、慶安元年ヨリ承應元年ニ至ルマデ五ヶ年間ニ成功セリ、普請奉行ハ一木權兵衛ナリ此一木權兵衛ハ後室津港第三回開鑿ノ時、工事ノ成ラザルヲ憤リ神ニ祈テ自殺セリ、今一木神社トシテ同地ニ崇祭ス、

沖ノ島
争論

土佐伊豫ノ境ニ沖ノ島アリ、兩國境界ヲ争ヒテ久シク決セサリシヲ、良繼藩主ノ命ヲ受ケテ、深ク舊記ヲ調べ、地理ヲ考へ、自ラ幕府ニ訴ヘテ、遂ニ舊時ノ境界ヲ復スルヲ得タリ。

捕鯨

土佐漁業ノ中、其働ノ目覺マシク、其利益ノ大ナルハ、捕鯨ヲ以テ第一トス。良繼奉行ノ時、尾張ノ

魚貝ヲ
放ツ

人尾池四郎右衛門ノ其術ニ長セルヲ聞テ之ヲ招キシカバ、四郎右衛門捕鯨船六艘ヲ率キテ土佐ニ來リ、始メテ幡多郡佐賀浦ニ捕鯨場ヲ設ケシヨリ、其術永ク當國ニ傳ハリ、遂ニ今日ノ盛況ヲ見ルニ至レリト云フ。

我土佐ハ三面海ニ臨ムノ國ナレバ、古ヨリ海魚ニ乏シカラザリシト雖、川魚貝類ノ如キハ、此時マデ其種類甚ダ多カラザリシヲ、良繼他國ヨリ鯉、鮒、鯰、鱈、浅蜊、貝、烏貝等ヲ採リ來リテ、神田川及ビ吸江灣ニ放チシヨリ、後次第ニ繁殖シテ、遂ニ

小學

土佐史要

卷之十

六

今日ノ如ク澤山ナルニ至レリト云フ。

良繼嘗テ江戸ヨリ歸リシ時珍ラシキ土産ヲ持チ歸リタレバ今日之ヲ開クベシトテ親族知友ヲ會シテ船ヲ吸江ニ泛ベ、淺蜊貝ヲ出シテ悉ク之ヲ江中ニ投セリ、人々怪ミテ故ヲ問フニ、良繼答ヘテ汝等ガ子孫ヲシテ飽食セシムベシト曰ヒケリトゾ、

火葬ノ禁

慶安四年

紀元二千三百一十一年

國中ニ火葬ヲ禁ジ、死者ハ悉ク埋葬セシメ、城下ニ棺商ヲ置ク。是ヨリ天下漸ク之ニ倣フ者多ク、且ツ今日ニ至ルマデ土佐ノ風俗火葬ヲ忌ム者ハ亦良繼ノ功ナリト云フ。

當時我土佐ニハ一種ノ習慣アリテ、人病甚シク臨終ニ至レバ、醫藥ヲ用キルコトヲ止メ、親族其枕ヲ圍テ大聲佛號ヲ唱ヘ、更ニ悲嘆スルコトナシ。良繼之ヲ改メント欲シテ一計ヲ案ジ、若シ喪ニ遇テ泣ク者アレバ、懇口ニ之ヲ吊ラヒ、且ツ金錢ヲ與ヘテ之ヲ賞セシヨリ、一時ハ賞金ノ爲メ、強ヒテ泣ク者アルニ至レリト雖、遂ニ之ニ因リテ風俗ヲ改良スルコトヲ得タリ。今モ尚ホ小兒ノ啼泣スル者アル時ハ、同輩相嘲リテ泣ク者三、五、善ク泣テ五、五ト曰フハ、原ト是ヨリ起レリト云フ。

泣者三

是ヨリ先、忠義公既ニ職ヲ世子忠豐公ニ讓テ老

寛文ノ
改革

セリ。寛文三年

紀元二千三百二十三年

七月家老深尾因幡山内

下總等意見書ヲ出タシ、近來上下困窮甚シク、百姓國外ニ逃亡スル者アルニ至ルハ、政道宜シキヲ失ヘルニ因ルコトヲ論ズ。是ニ於テ忠義公、忠豐公、諸家老ト評議シテ、遂ニ大改革ヲ行ヒ、奉行野中良繼ノ職ヲ免ジ、國中ノ課役ヲ減セシカバ、良繼自ラ請テ、香美郡中野村ノ領地ニ退居シ、幾程モナク病テ卒ス、年四十九。明年又野中氏ノ知行ヲ沒收シテ、遺族ヲ宿毛ノ領主安東氏ニ預ク、之ヲ寛文ノ改革ト謂フ。

薰的

寛文四年十一月、瑞應寺

江ノ口村

ノ住僧薰的、忠義

良繼ノ三女ニ婉子ト云フアリ、後赦ニ遇ヒテ宿毛ヨリ還リ、朝倉村ニ住シテ醫ヲ業トス、賢徳アリテ終身人ニ嫁セズ、學ヲ好テ詩文ヲ善クセリ、嘗テ朧夜ノ月ヲ著ヘシテ、婦女ノ心得ヲ論セリ。

公法號ノ國家長久ノ文字ニアラザルコトヲ抗論シ、明年法會ノ時、又眞如寺潮江村ノ住僧ト坐席ノ上下ヲ争ヒ、頗ブル不穩ノ舉動アリシカバ、奉行捕ヘテ獄ニ投ス。薰的獄ニ在ルコト數年、遂ニ食ヲ斷テ死セリ。後世神トナシテ之ヲ祭ル、今ノ洞ヶ嶋神社是ナリ。

忠義公ノ法號ハ眞如寺ノ名ツクル所ニシテ、竹巖院龍山雲公ト曰フ。

元禄ノ
飢饉

元禄十六年紀元二千三百六十二年豊房公五代ノ時、洪水火災等

ノ變事打チ續キ、米穀缺乏シテ人民餓死スル者多シ。公乃チ國用ヲ節シテ救助ニ盡力シ、米賣場ヲ十ヶ所ニ設ケテ貧民ヲ救フ。此時救助ヲ受ケシ者、實ニ十二萬人ノ多キニ及ベリト云フ。又國用ノ缺乏ヲ補ハンガ爲メ、銀札ヲ發シテ國中ニ通用ス、是レ土佐ニ於テ紙幣發行ノ始ナリ。

寶永ノ
地震

是ヨリ先貞享元年安藝郡羽根浦ニ飢饉アリ、浦吏岡村十兵衛官倉ヲ發キテ貧民ヲ賑ハサンコトヲ請フ、官議遷延久ウシテ決ヒズ、十兵衛乃チ私ニ官倉ノ米ヲ出タシテ飢民ヲ賑ハシ自及シテ死ス、後世神トシテ之ヲ祭り鑑雄神社ト稱ス、
寶永四年紀元二千三百六十七年十月四日、豊隆公六代ノ時、大地

高知城ノ
火災

震アリ、海嘯深ク陸地ニ侵入シテ、國中慘狀ヲ極ム。死スル者千八百餘人、家屋ノ流失顛覆セル者一萬五千、其他田地産物等ノ損害、擧クルニ堪ヘズ。幕府爲メニ明年藩主ノ參勤ヲ免スルニ至ル。享保十二年紀元二千三百八十七年二月、豊敷公八代ノ時、城西越前町ヨリ出火シ、高知城ヲ延焼シ、城下ノ市街大半灰燼トナル。後城郭ヲ再築シ、十一年ヲ經テ全ク落成セリ。高知公園ノ咸臨閣ハ即チ此時ノ建築ナリ。

二月朔日越前町ヨリ出火、高知城ヲ延焼セリ、此時焼失戸數千三百翌日又同所ヨリ出火、焼失千二百戸ナリ

小學

上佐史要

卷之下

九

教授館

豐敷公ハ學問ヲ好テ諸藝ニ通ジ、最モ文章ヲ善クセリ。寶曆十年紀元二千四百二十年始メテ學校ヲ北會所キタケイシヨ追手筋ニアリノ内ニ設ケテ、教授場ト稱シ、儒臣ヲ召シテ經書ヲ講セシム。後豐雍公ノ時ニ至リ、更ニ之ヲ擴張シ、改メテ教授館ト稱ス。是レ土佐學校ノ始ナリ。

豐雍公亦學ヲ好ミ屢ハ館ニ出テ、諸士ト經史ヲ講究ス、嘗テ自ラ教授館ノ三字ヲ書シテ額トナシ、又孔子ノ像ヲ畫キテ之ヲ床上ニ掲グ、當時出席者ノ數一日三百人ニ及ヘリト云フ、

天明ノ改革

天明七年紀元二千四百三十七年九月、豐雍公九代、靖徳院殿ト號ス英斷ヲ以テ大改革ヲ行ヘリ。此時大平久シク打チ續キ、

風俗漸ク奢リ、且ツ連年飢饉相次ギテ國用足ラズ、人民困窮餓死スル者アリ、池川モチキ用居ノ民七百人、紙税ノ重キニ堪ヘズシテ、伊豫ニ脱走シ、高知市中ノ貧民等、黨ヲ結デ富豪ノ家ニ亂入スルナドノ暴動アリテ、人心爲メニ穩カナラズ。豐雍公乃チ家老山内隼人ハヒト、儒臣谷真潮等タニマシホガ意見ヲ聽キ、深ク已ラ罪シテ改革ヲ行ヒ、幕府參勤ノ儀式ヲ畧シテ、十萬石諸侯ノ格ニ准ズ。執政深尾内匠等ヲ退ケ、谷真潮ヲ儒家ヨリ舉ゲテ、大目付トナシ、久徳直利等キウトクナホトシヲ以テ新ニ勘定奉行ニ任ゼシカバ、

是ヨリ政道大ニ改マリ、人民安堵ノ思ヲナシ、公ノ美名諸侯ノ間ニ轟クニ至レリ。去レドモ、改革ノ後僅ニ二年、不幸病ヲ得テ卒ス年四十、國人嘆惜セザルハナシ。

豊雍公改革ノ時ヨリ自ラ手元金ノ半ヲ減ジ常服ハ總テ木綿ヲ用キ朝夕ノ供饌亦僅ニ一汁二菜ノ薄味ニ過ギズ平生ノ玩好一切屏ケテ用ヒズ籠鳥ヲ放テ造花ヲ毀ツニ至レリト云フ、

揉貫井ノ起原

此改革ノ前茶道高橋ト半意見書ヲ獻シテ自殺シ、吉本虫夫亦肌ニ白装束ヲ着シテ封事ヲ上リシ等ノ珍事アリタリ、
寛政十二年紀元二千四百六十年春、豊策公トヨリ代ノ時、町奉行馬詰ウマ親音シメカネ近江國ヨリ工夫數人ヲ招キ、始メテ揉貫井モミヌキヲ中新町ニ掘ル、所謂櫻井ニシテ、土佐揉貫井

ノ始ナリ。

萬次郎

天保十二年紀元二千五百一年正月、豊資公トヨシ代トヨシノ時、幡多郡中濱ノ人萬次郎マンジロウ時トキ二年、宇佐浦ノ漁夫數名ト蹉陀岬ヲ距ル海上數里ノ所ニ於テ暴風ノ難ニ遇ヒ、漂流シテ無人島ニ至リ、鳥魚ノ肉ヲ生食シ居ルコト數月、遂ニ米國ノ捕鯨船ニ助ケラレテ彼國ニ至ル。萬次郎外國ニ在ルコト十五年、刻苦勉強シテ彼ノ國語ニ通ジ、頗ブル航海ノ術ニ長セリ。嘉永五年六月歸朝スルニ及テ藩廳命シテ禄ヲ賜ヒシガ、尋テ幕府ノ官吏トナレリ。

學問技藝ノ發達

山内氏入國ヨリ天保年間ニ至ル凡二百年ノ間ニアリテハ、大平久シク打チ續キタルト共ニ、學問諸藝モ漸々發達シタリ。二代ノ藩主忠義公ノ時ニハ、谷時中、野中兼山、山崎闇齋、小倉三省等ノ學者一時ニ出デ、程朱ノ學大ニ土佐ニ起レリ。寛文ノ改革後ハ、此等ノ學者、或ハ死シ或ハ去リ、殆ド中絶セントセシ時、谷泰山^{タニシンザン}出デ、大ニ力ヲ學問ニ盡シ、門人業ヲ受クル者頗ブル多ク、續テ豐敷豐雍ニ公ニ至テハ、學校ヲ立テ、盛ニ藩士ノ子弟ヲ教育セリ。去レドモ當時士人ノ教育ハ尚

式馭初ノ

ホ武道ノ一方ニ傾キ、主トシテ弓馬刀槍ノ技ヲ學ベリ。殊ニ毎年正月十一日ニハ、藩主親ラ武ヲ檢スルノ式アリテ、之ヲ馭初ト稱シ、藩士盛粧シテ騎馬ヲ試ミシガ如キハ、維新ノ初ニ至ルマデ傳ヘテ盛典トセシ所ナリ。

當時醫師ニハ甲把瑞^{カッパズエキ}高岡郡窪川村ノ人アリ、畫家ニハ

中山^{ナカヤマ}廷冲^{テイチュウ}高知境町ノ人高アリ、彫刻家ニ武市甚七

名^ナ知^チ二^ニ十^{ジュウ}代^{ダイ}町^{チュウ}ノ^ノ人^{ヒト}ニ^ニシ^シテ^テ有^{アル}アリ、又天文家ニ川谷貞

六^{ロク}土佐郡^{ツクサノ}野村^{ノノ}ノ^ノ人^{ヒト}ニ^ニシ^シテ^テ有^{アル}アリ、又天文家ニ川谷貞

曆十二年ノ官曆ニ、日蝕ヲ漏ラセルヲ發見セシ

花臺

ヨリ、其名天下ニ著ハル。其他文武諸藝ニ名アル者、枚舉ニ勝ヘズ。萬治年間紀元二千三百二十年ノ頃、櫛屋道清等、藩用ヲ以テ長崎ニ往來セシ時、彼地ノ花鉾ヲ見倣ヒ、還テ之ヲ造リシヨリ、漸ク進歩シテ、遂ニ近世ノ花臺トナレリ。

第五章 豊信公ノ時ヨリ廢藩置縣マデ

嘉永六年紀元二千五百十三年、亞米利加ノ使節、彼理軍艦數艘ヲ率テ、始メテ相州浦賀ニ來リシヨリ、歐羅巴各國相次デ使ヲ遣ハシ來リテ通商ヲ求ム。而シテ德川幕府ノ外國ニ對スル處置、頗フル因循ナリシカバ、天下有志ノ士ハ、蜂起シテ尊王攘夷ノ說ヲ唱フルニ至リ。人心日々ニ幕府ヲ離レテ、王室ニ歸シ、德川氏二百七十年ノ積威モ、今ヤ地ニ墜チントスルノ時運トハナレリ。
容堂公 十五代藩主豊信公ハ、性英邁ニシテ、大ニ藩ノ政

山内容堂公ノ像



上村昌訓謹画

治ヲ改革シ、又夙ニ勤王ノ志厚ク、江戸ニ在テ、水戸老公等ト尊王攘夷ノ説ヲ唱ヘ、國家ノ爲メ盡カスル所多カリシガ、後職ヲ世子豊範公ニ譲リ、自ラ容堂ト稱ス。次デ安政五年紀元二千五百十八年八月、幕府ノ怒ニ觸レテ、品川ノ

別邸ニ幽セラレ。

容堂公夙ニ海外學術ノ我ニ勝レタルヲ察シ、醫師ノ洋方ニ通セル者ヲ擧ケテ侍醫トス、當時漢洋ニ方ノ軋轢甚シカリキト雖、土佐國中早ク西洋醫術ノ開ケシハ全ク公ノ先見ニ依レリ、水戸ノ志士住谷寅之助ナル者、嘗テ容堂公ニ面謁ヲ請フ公之ヲ許ス、寅之助將サニ容室ニ入ラントシテ襖ヲ開クヤ、忽チ人アリ躍リ出デ、寅之助ヲ坐中ニ投ス、驚テ其人ヲ見レハ則チ公ナリ、時ニ寅之助少シモ騷ガザリシカバ公モ其器量ニ感ジ、夫レヨリ胸襟ヲ開キテ閑談セリト云フ、公ノ機警人意ノ表ニ出ヅルコト概子此ノ如シ、

安政ノ地震

安政元年

紀元二千五百十四年

十一月五日

大地震アリ。海嘯

侵入シテ損害非常ニ多ク、死者凡四百人、家屋ノ燒失顛覆セル者二萬ニ達ス。其後小震屢ハ起リ、三年ヲ經テ始メテ鎮定セリ。是ヲ安政ノ大變ト

謂フ

致道館

文久二年紀元二千五百二十二年致道館ヲ城下西弘小路ニ設

ク、年十六ヨリ三十九マデノ藩士ヲシテ、日々館

ニ出デ、文學武藝ヲ學バシム。俗ニ文武館ト稱

セシハ是ナリ。

吉田參政

此年四月八日、城中ニ於テ讀書ノ會アリ、賊參政

吉田元吉ヲ其歸途ニ要シテ之ヲ殺ス。藩廳命シ

テ、嚴ニ其賊ヲ索ムレドモ、終ニ捕フルコト能ハ

ズ。元吉豐信公ノ時ヨリ參政トナリ、公ヲ佐ケテ

大ニ藩政ヲ改革シ、權勢甚ダ盛ニ、嘗テ致道館ヲ

立テ、藩士ヲ教育シ、鑄造場石立村ヲ設ケテ鐵砲

ヲ製造スル等、改正スル所頗ブル多シ。去レドモ、

智餘アリテ徳、足ラズ。且ツ勤王黨ト意見合ハザ

ル所アリテ、遂ニ此禍ニ遇フ、年四十七ナリ。

此年八月、豐範公京都ニ入リシカバ、朝廷詔シテ、

薩長二藩ト共ニ、京城ヲ護ルヘキコトヲ命セラ

ル。是レゾ薩長土ノ威名、今日ニ至ルマデ天下ニ

轟クノ始ナリ。次テ容堂公モ亦召ニ依テ入京シ、

朝廷幕府ノ間ニ周旋スルコト一方ナラサリシ

ヲ以テ、朝廷屢バニ公ノ功ヲ賞シ賜ヘリ。

京城守衛ノ命

勤王黨

當時藩論概子二派ニ分カレ、武市半平太坂本龍馬、吉村寅太郎、平井収次郎以下勤王黨ノ人々ハ、盛ニ尊王攘夷ノ説ヲ主張シ、身命ヲ抛テ、只管國事ニ奔走セリ。

平井間
崎廣瀨
ノ三士

文久三年平井収次郎、間崎哲馬、廣瀨健太ノ三人、屢バ京都貴顯ノ内ニ出入シ、遂ニ朝彦親王アサヒヒコノ宮ト稱ノ令旨ヲ請ヒ得テ、之ヲ豐資公ニ致セシガ、幾程モナク罪アリテ本國ニ送ラレ、此年六月遂ニ切腹ヲ命セラル。

収次郎ハ土佐郡久万村ノ人隈山ト號ス、少時勢州齊藤拙堂ノ門ニ遊ビ後上京シテ他藩應接役トナリ天下有志ノ士ト

交ヲ結ビ、武市半平太等ト常ニ相提携シテ、屢バ皇族貴顯ノ家ニ出入シ、縱橫ノ計策ヲ畫ス、人以テ支那戰國策士ノ風アリトナス、死スル時年二十九、
哲馬ハ幡多郡江ノ村ノ人滄浪ト號ス、十六歳江戸ニ遊ビ安積良齊ノ門ニ入テ塾長トナリ、博ク經史ニ通ジ、最モ詩ヲ善クス、然レドモ性豪放小節ニ拘ラズ、酒ヲ好ミ人ヲ凌グ、故ニ世ニ用ヒラレズ不平ヲ詩ニ洩ラス者多シ、死スル時年三十、

吉村寅
太郎

初メ吉村寅太郎國ヲ出デ、京都ニアリ。此年八月外國人親征ノ爲メ、大和行幸ノ詔出ツルヤ、同志ノ士ト侍從中山忠光ヲ奉ジテ、先ヅ兵ヲ大和ニ擧ゲ、自ラ天誅組ト稱ス。近傍諸藩ノ浪士、來屬スル者頗フル多ク、勢漸ク振ヘリ。然ルニ時勢俄ニ變ジ、幕府諸藩ニ命ジテ、之ヲ討タシムルニ至

リシカバ、戦争百餘日ニシテ軍敗レ、寅太郎奮戦シテ遂ニ自殺ス。

寅太郎ハ高岡郡構原村ノ庄屋太平ノ長子、年十九ニシテ同郡北川村ノ庄屋トナル、幼ヨリ穎悟大志アリ、學ヲ好ミ武藝ニ達シ氣宇寛宏能ク人ヲ愛シ、父母ニ仕ヘテ亦頗フル孝ナリシト云フ死スル時年二十六、

是ヨリ先武市半平太、國ニ在テ益スカヲ國事ニ盡シ、屢バ藩政ヲ改革セシコトヲ建議セシカバ、爲メニ嫌疑ヲ蒙リ、此年九月、遂ニ同志ト共ニ獄ニ投セラレ。

野根山事件

元治元年紀元二千五百二十四年九月、安藝郡ノ郷士清岡道之助、清岡治之助等、屢バ藩政ヲ改革シ、武市半平太

等ガ罪ヲ宥メンコトヲ請フト雖、用キラレズ。遂ニ同志二十餘人ト、兵器ヲ携ヘ野根山ニ屯集シ、次テ阿波ニ脱走セントス。藩廳警吏ヲ發シテ之ヲ捕ヘシメ、悉ク奈半利磧ニ斬ル。

武市半平太

慶應元年紀元二千五百二十五年五月、武市半平太、遂ニ人心ヲ煽動シ、國法ヲ亂タルノ罪ヲ以テ切腹ヲ命セラレ、時ニ年三十七。遺骸ヲ家ニ賜ヒ、長岡郡吹井ノ里ニ葬ル。後明治二十四年、朝廷詔シテ坂本、吉村、中岡三士ト共ニ、特ニ正四位ヲ贈ラル。

半平太ハ長岡郡仁井田村吹井ノ人、名ハ小楯瑞山又ハ茗礪ト号ス、人トナリ狀兒雄偉沈毅ニシテ喜怒色ニ見ハレズ、擊

大改返
上ノ上
書

坂本
中
岡
二
士

劍ニ長シ旁ヲ畫ヲ善クセリ、當時國事ニ盡悴シ人々推シテ
 土佐勤王黨ノ首領トナセリ、
 慶應三年九月、容堂、公深ク天下ノ形勢ヲ憂ヒ、將
 軍德川慶喜ニ上書シテ、大政ヲ朝廷ニ返上シ、共
 ニ皇室ヲ護ルベキコトヲ論ジ、尚ホ後藤象次郎
 等ヲ遣ハシテ、之ニ説カシメシカバ、將軍遂ニ意
 ヲ決シテ之ニ從フ。是ニ於テ鎌倉以來七百餘年
 ノ政權、一朝ニシテ王室ニ復歸セリ。
 此年十一月坂本龍馬、中岡慎太郎、賊ノ爲メ京都
 河原町ノ旅館ニ殺サル。初メ龍馬等勤王ノ説ヲ
 唱ヘ、國ヲ出デ、四方有志ノ士ト東西ニ奔走シ、

遂ニ薩長ニ藩連合ノ切ヲ奏シ、同志ノ爲メ大ニ
 重セラル、ニ至ル。大權朝廷ニ歸スルノ盛事ヲ
 觀ルヲ得タルハ、二士等周旋ノ切實ニ多キニ居
 ルト云フ。

龍馬ハ高知ノ藩士ナリ、少シテ磊落小節ニ拘ラズ、長シテ江
 戸ニ往キ海軍ノ術ヲ勝安房ニ學フ、後東西ニ奔走シ、遂ニ長
 州ニ赴キテ海援隊長トナリ、西郷隆盛等ト交ル、隆盛常ニ人
 ニ語テ曰ク、龍馬ハ眞ニ天下ノ英雄ナリ、其未ダ弱冠ナラサ
 リシ時、泗水ノ技ヲ學ブ、一日兩甚シ、龍馬乃チ蓑笠ヲ着ケテ
 出ヅ、友人途ニ會テ之ヲ止ム、龍馬笑テ曰ク、水ニ入レバ必ズ
 濕フ、何ゾ降雨ヲ恐レント、其志行己ニ此ノ如キ者アリシト
 云フ、死スル時年三十三、
 慎太郎ハ安藝郡北川郷ノ人、父ハ庄屋タリ、學ヲ好テ經史ニ
 通ズ、後國ヲ脱シテ京攝ノ間ニ往來シ、遂ニ長州ニ往テ陸援
 隊長トナリ、坂本龍馬ト名ヲ齊フス、死スル時年三十、

校用上
會津征伐

廢藩置縣

明治元年紀元二千五百二十八年四月、會津征伐ノ事起ルヤ、參謀板垣退助ヲ始メ、我藩士ハ實ニ華々シキ軍功ヲ顯ハシ、此年九月、東北平定ノ功ヲ奏セリ。明年正月、我藩又薩長肥三藩ト、卒先シテ藩藉奉還ノ舉アリシガバ、天下ノ諸侯相尋テ之ニ倣ヒ、藩ヲ廢シテ郡縣ノ治ニ復セリ。是ヨリ大權全ク王室ニ復古シ、遂ニ立憲至治ノ聖世ヲ仰クニ至リシモノハ我藩主ヲ始メ、土佐人士ノ功、蓋シ與カリテ大ニカアリト謂フベシ。
小學校用土佐史要卷之下終

明治廿六年八月廿日印刷
同 廿六年九月一日發行

下卷

九錢

著述者 青木義正

印刷兼發賣人 村岡榮助

發賣人 澤本駒吉

全 山中專助

全 小川代次

全 吉岡平助



高知縣土佐郡江ノ口村大川筋拾七番邸

高知縣高知市本町筋三十六番屋敷

高知市種寄町

高知市境町

高知市本町壹丁目

大阪市東區備後町四丁目

